PROCEEDINGS 08 113-124
July 2009

父親の子育て体験の布置
―夫婦間の相互性のズレと仕事と子育ての統合の試みによる検討―

谷　田　征　子
（人間発達科学専攻）

Ⅰ　問題と目的

本研究は、父親の子育て体験が、夫婦間の相互性のズレと仕事と子育ての統合の試みによって、質の異なる語りとなるかを検討するものである。

心理学において、1990年以降、生涯発達的視点から、親になることによる発達は、親としてどう成長するのか（柏木ら，1994）と個人に焦点が当てられてきた。そこでは、その個人を取り巻く文脈はその背景として考えられた。しかし、子育ては、親子の中だけではなく、父親と母親のかかわりという関係性の中での営みであり、地域や職場とのかかわりと互いに関連しあっている（鑪，2002）。つまり、親の子育て体験は、子どもとの関係や、個人に限定されるものではなく、父親―子―母親という三者関係を基盤に、夫婦間でどのようにかかわっているのかというシステム的視点が求められる（Hirsch et al, 1986；Vandell et al, 1997；谷田ら，印刷中）。

夫婦間のかかわり合い、特に、夫婦間の対等な関係性に関する研究は、社会構成主義の視点からなされてきた（例えば、Cowdery et al，2005；Wiesmann et al，2008）。対等な関係性（relationship equality）とは、相互のかかわりで折り合い（accommodation）をつけること、関係性における他者への配慮は相互的であること、パートナーのウェルビーイングという感覚を相互にもち合わせている（Knudson-Martin et al，2005）ことを示す。例えば、シンガポールの共働きの夫婦20組に面接調査を行ったQuek et al（2006）によれば、対等な価値を内在化するプロセスの一つとして、内的な自己内省（self-reflection）をあげている。そこでは、夫が妻との関係をどうオーガナイズするのかという葛藤を経験しており、自分に何が期待され、自分たちは何をしようとしているのかという未来に関する自己内省が行われている。つまり、夫婦間のかかわり合いを通じてそれぞれの体験は調整され、個人のみを取り上げるのではなく、夫婦というシステム的視点が必須である。

そのようなシステム的視点から、母親が子どもをもつことで新しい心的編成が起こることを、Stern（1995/2000）は母性のコンステレーション（motherhood constellation）と呼んだ。そこでは、妻、母親、職業人といった、複数のアイデンティティが再度組みなおされ、内的に布置される。同時に、母親の援助基盤として、夫の役割が重要だとされているが、初めての子どもであれば未経験なため、夫が十分に母親を援助することは難しい（Boath et al，1998）。夫は保護や援助を妻から期待されるが、当然、妻との間でズレが生じ、職業人としての自分と父親としての自分という相異なる役割の中で、葛藤が生じる（Hall，1991）。それは、夫婦間でのかかわりにはさまざまなズレが見られると同時に、個人の体験においても異なるアイデンティティ間でズレが生じ、そうしたズレが親の子育て体験にさまざまな葛藤を生み出すのではないか。

相異なる役割を統合すること、つまり、特定の自己像を築き、固定した家族関係や組織と結びついた文脈のなかで生きるのではなく、ライフステージごとに新たな自己の可能性を発見し、アイデンティティを再編成することが、成人期に問われる（小此木，1989）。Eriksonによるアイデンティティとは、何かと何かのアイデンティティであり、その両者にあるズレをズレとして引き受けながら、受け入れてゆく動きである（西平，1993）。その意味では、父親の子育て体験を、夫、父親、職業人といった、複数のアイデンティティをどのように統合しようとしているのか（あるいは、しないのか）を捉える視点が必要である。ここで、統合とは、努力して達成する抽象的で高徳な目標ではなく、むしろ、“様々なものごとを結びつけて一つの具体的な形を描き出す力”であり、“1日1日をより良く生きるために生活の細部に地道な注意を払いながら、大小の活動を日々こなしていくことを要求するもの”であり（Erikson et al，1997/2001；p. x vi）、生きられた体験から生成されることを含意する。

このように、Eriksonはアイデンティティを捉えただけ

でなく、ライフサイクルの観点から、自己を力づけると同時に他者を力づけるというかかわりによって、まるごと一人の人全体（whole people）の発達を考えた。そこで問われるのが、重要な他者とのかかわり、相互性（mutuality）である。それは、生き生きとしたかかわり合い（vital involvement）であり、“相手を変えることが実は同時に自分を変える”という、“異質でありつつまさに異質であることによってこそ互いに補完し合うパートナーシップの関係（西平，1993）”である。夫婦間のかかわり合いでいえば、夫婦が同じように子どもに関わることや、家事や子育てを平等に分担することではなく、互いの違いを受け止めつつ、夫婦間で柔軟な調整が行われているのかという問題として考えられる。

さらに、アイデンティティを一つのまとまりとして考える上で、〈ホールネス wholeness〉〈トータリティ totality〉という区別が提示されている（Erikson，1980）。ホールネスとは、互いの異質性を内包しつつも一つのまとまりを成し、異質なものどうしがズレを生み出すからこそ、互いに影響を及ぼしあう関係であり、かつ、異質なものの境界（boundary）は柔軟に調整されるものである。一方、トータリティは境界が堅いものであり、一つのまとまりを成しているかのようであるが、異質なものどうしがばらばらに存在している。その視点から見ると、夫婦間のかかわり合いでは、その境界は柔軟に調整され、互いの違いを相補いながら交流するものがホールネスであり、互いに排他的となり、それぞれの違いが際立ったままであるものがトータリティであるといえる。鑪（2006）も、互いの境界を尊重し、互いに開きあい、生活することは、成人期の倫理として重要なものであるという。

この点は、アイデンティティを形作り、一つのまとまりとして統合するためには、他者の目が必要であるという主張（Stern，2004/2007）とも重なる。他者の目とは、他者への関心と、他者からの関心である。他者への関心とは、他者の気持ちに気づく体験であり、他者からの関心とは、他者から照らし返される体験である。父親では、妻への体験に気づくことであり、かつ、父親の体験を妻がどのように知っているのかを父親が気づくことから構成されるといえる。つまり、父親が、主体となって、仕事、家庭など生活全体の布置を編成しなおし、一つのまとまりとして捉えるためには、パートナーである妻との関係の中で、その異質性を含みこんで捉えることが必要である。

以上のことから、父親の子育て体験には、父親―子―母親というシステム的視点のもと、パートナーとのかかわり合いのズレと複数の役割によるアイデンティティを、まとまりとして受け入れ、内的に布置されているかが重要であると指摘できよう。

さらに、先述したとおり、Erikson のライフサイクル論において、ひとは他者とのどのようなかかわりの中で生き生きとしてゆくのか、つまり、ひとの発達を、ライフステージでの他者との相互性の拡がりの中で捉える。その意味では、子育ては、子どもを育てながら、過去を振り返り、未来へ紡いでゆく時間軸と、重要な他者との関係の拡がりという空間軸が交差するなかで展開する営みであるといえる。そこで、本研究では、父親の子育て体験の分析のカテゴリーとして、その２つの軸を採用する。

時間軸　自己―他者のつながりと、過去を現在に位置づけ、そこから未来をいかに立ち上げるのかという時間軸は密接な関連があり、特に、他者に開かれていることは、未来に開かれていることと同時的な過程である（白井，2008）。子育てでは、子どもが病気になるという予想がつかないことが起こりやすく、時間的展望の中でも未来の視点をもち得ているのかが、親にとって葛藤を乗り切る上で重要である。また、現在の瞬間には過去だけでなく未定（open-ended）の未来が含まれている（Stern，2004/2007；p.29）。したがって、本研究において、時間軸として未来の見通しをもつことを取り上げる。

空間軸　成人期の発達課題「世代性（generativity）」には、子どもをはぐくむことと同様に仕事や地域での相互のかかわり合いから基本的強さ（basic strength）が生じる（Erikson，1964/1973）。特に成人期におけるひとの発達を考える上で、その人を取り巻く文脈を含めて捉えることが重要であり、そこには、先に触れた他者との相互理解や、時間軸だけでなく、社会的な場である生活空間が包含される（南，1995）。翻って、父親の場合、概して、子育てに関する情報を与え合う環境が乏しい。しかし、限られた環境の中で、職場や地域でのかかわり合いを通じ、子どもの発達の知識など得られる情報もあるのではないか。情報とは相互作用の中から生まれてくるものであり、他者から情報をもらい、今度はその情報に対してこちらが自分の考えを伝えるという相互的な過程の中で、新たなやりかたが見出される（金子，1992）。つまり、身近な職場や地域でのかかわりを通じて、情報をもらい与え合うことで、子育てに対する新たな理解が生まれると思われる。以上のことから、父親を取り巻く生活空間として、職場と地域でのかかわりを取り上げ、空間軸と呼ぶ。具体的には、職場でのかかわりでは、子どもに関することを同僚に相談すること、一方、地域でのかかわりでは、地域での活動に参加する、地域の子育てひろばに出かける、家族どうしの交流があるということが含まれる。

以上より、本研究では、父親の子育て体験が、夫婦間の相互性のズレと仕事と子育ての統合の試みによって、どのような語りの違いが見られるのかを、検討する。そのため

に、まず、夫婦間の相互性尺度（谷田ら，2007）の得点の差に基づいて夫婦間の相互性のズレを算出し、群を抽出する。夫婦間の相互性のズレについて、3群（夫婦間でズレが相対的に少ない群、夫婦間でズレが大きい群の内、一方の得点が高い群と低い群）が想定される。次に、子育てと仕事を分離させず、全体として受け入れようとしているかに基づき、抽出された群を分類する。というのも子育てと仕事を統合しようとすることは、それぞれの領域に対して主体的に取り組んでいると考えられる（岡本，1995）。つまり、こうした分類によって、父親が主体的に子育てにかかわっているのかを、評価できる。この分析枠組みに基づいて、パートナーの体験への気づき、そして、時間軸（未来の見通しをもつこと）と空間軸（職場と地域でのかかわり）の視点から、群の特徴を明らかにする。最後に、これらの構成要素をもとに、父親の子育て体験がどのように布置されるのかを検討する。

このように、子育てをどうオーガナイズするのかという体験や、夫婦間の関係性を問う研究では、面接調査による質的分析が適切であり（Everingham et al，2006；Mauthner，1998；Olin et al，2003）、その方法を採用する。

Ⅱ　方法

2008年10月から2009年1月にかけて、就学前の子どもをもつ夫婦15組[1]を対象に、面接調査を行った。協力者の募集にあたって、都内A区の子育て支援グループを通じて呼びかけた。そして、協力者から知り合いを紹介してもらったり、筆者の知り合いに依頼した。協力者の住まいは、東京都、千葉県、神奈川県の首都圏である。面接は主に協力者の自宅にて行い、平均1時間半程度要した[2]。面接の質問内容は、最初に、父親に対して「子育てしながら1日どのように過ごしているのか」とたずね、母親に対しても同様の質問を行い、地域や仕事を通じた親どうしのかかわりや、互いの語りを聞いて感じたことをたずねた。事前に、夫婦間の相互性尺度（谷田ら，2007）と、プロフィール（年齢、学歴、職業形態、結婚年数、帰宅時間、1か月の残業時間）を質問紙にて記入してもらった。

(1) 夫婦間の相互性のズレの分類

筆者が福岡市で参加し、実施した就学前の子どもをもつ夫婦301組のデータに、本研究の15組のデータを加えて、夫婦間の相互性尺度の下位因子〈連携感〉の父親の得点から母親の得点を引いた差を算出した[3]。その結果、平均値は.−36、標準偏差は.78であった。平均値を基準に、マイナス1標準偏差（−1.14）以下の群（父親の得点が低い群）、プラス1標準偏差（.42）以上の群（父親の得点が高い群）、その中間の群（夫婦間の得点のズレが相対的に少ない群）と3群を作成し、それぞれ、2名、11名、2名が該当した。

(2) 仕事と子育ての統合の試みの分類

高齢者の人生を統合する語りの構造（山口，2004）を参考に、父親が生活に自らの仕事と子育てを組み入れ、再編成しているのかについて、「父親が仕事と子育てを統合しようとしているのか、いないのか」という観点から、協力者ごとに分類した。その基準は以下の通りである。

1. 統合の試み有り：生活の中に、仕事と子育てを受け入れようと評価している（例「基本的には2人で。できるのであれば2人でやろうという話はしています。やっぱりそこがもう臨機応変でやるしかないので」）。
2. 統合の試み無し：生活の中で、仕事と子育てを分離したものと評価している。

「大変･･･大変さと、というか大変なのは大変だなと。でも手伝えないので頑張ってくれと･･･かかわるとかそういう認識はないと思う」

なお、信念だけでなく（例えば、「できるだけ早く帰って、という意識はできたと思います」）、実際、仕事と子育てを折り合う「行動」の語り（例えば、「子どもが生まれてからあまり残業をしないようにしている部分がある、朝ご飯を用意して。食べさせて、ぼくが連れてって」）を確認し、分類した。

表1に、2つの分類を基に抽出された群とその内訳を示す。

夫婦間の相互性において、父親の得点が高く、子育てと仕事を統合しようとする群を「ズレ父高・統合有群」、父親の得点が低く、子育てと仕事を統合しようとしない群を「ズレ父低・統合無群」とした。また、夫婦間の相互性の得点のズレが少ない群の内、子育てと仕事を統合しようとする群を「ズレ少・統合有群」、子育てと仕事を統合しようとしない群を「ズレ少・統合無群」とした。なお、父親の得点が高く仕事と子育てを統合しようとしない群と、父親の得点が低く仕事と子育てを統合しようとする群では、該当者がいなかった。

抽出された4群の夫婦間の相互性の得点の差と、プロフィールを表2に示す。

表1　夫婦間の相互性のズレと仕事と子育ての統合の試みによる分類

	父親の得点が高い群	夫婦間でズレが少ない群	父親の得点が低い群
統合の試み・無	0	3	2
統合の試み・有	2	8	0

表２　各群の夫婦間の相互性の得点の差とプロフィール

群	ID	相互性の差	年齢		学歴		職業		結婚	帰宅時間		残業時間	
			父親	母親	父親	母親	父親	母親	年数	父親	母親	父親	母親
ズレ父高・統合有群	ID4	0.42	34	31	大学	大学	フル	フル	4	20	19	30	20
	ID15	0.60	38	38	大学	大学	フル	パート	5	25.2	14	3.3	0
ズレ父低・統合無群	ID1	-1.20	41	38	大学	大学	自営	育休	9	20		60	
	ID11	-1.60	36	33	大学	短大	フル	無職	4	22		3	
ズレ少・統合有群	ID2	-1.00	47	45	大学	大学	フル	フル	5	22	不定	100	不明
	ID3	0.00	44	39	大学	大学	フル	無職	8	20		25	
	ID5	-0.20	41	38	大学	短大	フル	無職	8	19		20	
	ID7	-0.20	38	38	大学	短大	フル	パート	4	23	18.5	60	5
	ID8	-0.60	40	38	大学院	専門学校	フル	フル	9	19	19.5	40	0
	ID9	-0.80	36	34	大学院	短大	フル	フル	5	21	19	90	1
	ID10	-0.20	33	32	大学	大学院	フル	パート	8	21	18	20	不明
	ID12	-0.80	35	30	大学院	大学	フル	フル	8	21	19	80	3
ズレ少・統合無群	ID6	-0.60	38	41	短大	高校	フル	パート	6	20.5	14.3	18	1
	ID13	-0.60	28	26	大学	大学	フル	無職	6	19		不明	
	ID14	-1.00	31	29	専門学校	専門学校	フル	無職	4	20.5		40	

注）子どもの数は、ID1 を除いて１人である。母親が無職か育休の場合、帰宅時間と残業時間の欄は、空白とする。
　職業では、フルタイム勤務をフル、パートタイム勤務をパートと記した。

協力者（父親）全体のプロフィールの特徴を述べる。年齢は、30 ～ 40 代前半が最も多かった。学歴について、13 名が 4 年制大学卒業であった。職業は一人を除き、フルタイムの正規雇用勤務であった。結婚年数は 4 ～ 9 年と、ある程度結婚生活を送っている。帰宅時間では、早くて 19 時、最も遅い人で 25 時（午前 1 時）を過ぎていた。1 か月の残業時間では、60 時間を超える人は 5 名であった。

Ⅲ　結果と考察

(1) 各群の検討：パートナーの体験への気づき

パートナーの体験への気づきの観点から、抽出された群の特徴を検討する。表 3 に各群のパートナーへの体験の気づきに関する語りの一部を示す。なお、「　」にて父親の語り、〈　〉にて母親の語りを示し適宜（　　）にて著者が補足した。

ズレ父高･統合有群（2 名）ID4、ID15 とも、パートナーの価値観や行動とのズレを語った。例えば、ID4 では、母親は〈子どもを中心に物事を考えるのが、全然慣れなかったですね、最初は〉と、〈(自分が）この子の母親で、自分が育てていくっていうような覚悟〉に葛藤していることに対して、父親は、「そういうのに、なかなか価値観が慣れなくって葛藤しているように見える、見えていましたけどね」と、「きっと、彼女の価値観の中では、結構仕事が目の前にあるもの。どっちかっていうと僕の場合は、まあ人生長いから、そのうちの 1 年とかっていう思いは、今現状、実際にね」と語った。父親は、妻（母親）の葛藤を引き受けながら、「(子どもの保育園の送迎について）えっと、あの最近はもう毎週当番」と子育てを主体的に生活に位置づけていると思われる。母親（妻）の行動や葛藤を受け入れ、自分もそれに対応してゆく動きが示唆された。

また、「しかし、まあ、(子育ては）でも優先順位はね、1 番ですから…それはそれでいいんじゃないですか (ID4)」「父親になればどこかでやらざるを得ないところはあるんですけれども（ID15)」と、子育てに対して受動的でありながらも、複数の役割の中で優先することと捉えている点が共通している。

ズレ父低・統合無群（2 名）ID1 ではパートナーの体験への気づきに関する語りは見られなかった。母親は、〈子育てに関しては（夫は）かなりやってくれているな〉と言いながらも、〈(夫は）私に対して、お母さんというのは、仕事だからってパキッと行っちゃうんじゃなくて、子どもの感じることを常に感じながらしてほしい〉と、自分に対して夫(父親)がどう感じているのかを語った。さらに、〈子育てで自分がつきつけられるときが一番ツライ、自分でやっていることを子どもにそのまま見せていいんだろうか〉と、自分の子どもへのかかわりが、夫（父親）に承認されていない不安があるのではないか。一方、ID11 では「(妻は）一緒にいるもんだっていう考えなんですが、僕は、やりたいことが違うんだったら、無理やりね、どっちかが合わせるっていうの、それは当然どっちにとっても必要だから、それはお互い好きなことをやったほうがいいんじゃ

表３　各群のパートナーの体験への気づき

		パートナーの体験への気づき	
		父親	母親
ズレ父高・統合有群	ID4	うん。でも、彼女はもっと仕事したいんですけど・・・そこをなんとかセーブさせて折り合いをつけるって感じですね。	男の人とか、働いてもいいけど、あの、やってね、ちゃんとみたいなところが、たぶん結構多いなかでいくと、わりかしそこいら辺を、すんなりと、まあ、あの、まあ、私も働くんだったら、自分ができる家事をやるのは当然だねっていうような感覚だったんで。
	ID15	本人（妻）も気付いていないけど、家庭でこう言っていて、割合イライラしているのは、こっち（妻）に対してイライラしていることのほうが多いんですよ。・・・それを気づかない。こっち（自分）が原因だと思ってる節があって。別にそれを、こっちだ、お前だっていちいち言うことではないから、ずっと黙って。「何で怒ってるの？　何で怒ってるの？」って、お前だって思うときはあるんだけど。	選択肢を自然と与えないといけないんじゃないかなって思ってた。
ズレ父低・統合無群	ID1	（なし）	朝１番はお母さんがしっかり抱きしめてあげてとか、多分そういうのをすごく思っているんで、やんなさい、仕向けられる、私は仕向けられてやりたくないと、自分の意思でやりたいと思ってしまうので。
	ID11	何で一緒に、その、行かないっていうか、その、普通ね、一緒にいるもんだっていう考えなんですが、僕は、やりたいことが違うんだったら、無理やりね、どっちかが合わせるっていうの、それは当然どっちにとっても必要だから、それはお互い好きなことをやったほうがいいんじゃないのっていうふうに言ってるんですけど、それが何かそれが最初嫌だった。	強制されることが、一番嫌いなんで。ね？
ズレ少・統合有群	ID2	やっぱり体力的な部分とかも含めて僕なんかより相当ストレスがあるんじゃないかなと思います。	（なし）
	ID3	（妻の仕事に対して）もうちょっとだから、そういう、なんか、フォーカスしてやったほうがいいんじゃないかなあとか思って。	だから、仕事を将来した方がいいとか、そういうのはすごく思ってくれているなっていうのは感じてますね、いつも。その、何て言うのかな、家計の足しにして欲しいとか、自分が楽になりたいからとかじゃなくて、私のためにやったほうがいいと思ってくれているのがありますね。
	ID5	まぁ、大変そうだな、本当に大変そうだなって。今になって、でも、大変なのは大変なのだろうって思っていたので、その状態が特別だとも思わなかった。今になって、ある程度余裕が出て、まわりともつきあっていると、相当大変だと分かるけど、子ども生むとそれだけ大変なんだなと思っている。	どこに相談したらいいのか、行き詰まりましたよね。その部分があって、夫は大変だったかなと。
	ID7	自分の理想と現実というのが、自分の中でこうしたいんだ、するんだていうのがあって、多分あると思うんですよ。	私はいいんじゃないと思う方なんで、夫はきちっとしなきゃなので、子どもにかかわり方が違うので、ここでやっぱりぶつかることが多いですよね。
	ID8	例えば、今週１回掃除機でとかね。それは忙しいのでしょうがないと思うんですけれども、なんかそれでやっぱり自分は毎日かけたいぐらいだから、そういうので逆にイライラしているのが分かるから、なんかすごく、なんか嫌だなと思うときがある。	（なし）
	ID9	一日中家に居て、子どもとずっと一緒に。例えば今自分の立場が子どもいつもついてもらうのが、ある一日中になったらしんどいだろうなと思って・・・そういう意味では同じお母さんたちの交流とかって大切なんだろうなっていうふうに、僕は実感しますけど。	こう、うん、（夫が）もうちょっと（子育てを）やりたいんだなっていうのは思ってたんですけど。
	ID10	結構大変だなって思うよね。どっちかが……。	（なし）
	ID12	そこにその、何ていうんでしょう。外とのかかわりが極端に減るので、だからそこに、こう、何ていうんでしょう、ストレスも発散できないでしょうし、あとはその情報のやり取りというか、もうすごく狭められるし。それは、まあ、ストレスだらけなんだろうなとも思いますからね。	あ、助かりますよね。私も働いていたいというのもあるので、なかなかね、自分ひとりで全部ということになると、なんか時間的にも体力的にもしんどい部分があるんですけど、やっぱりしんどいときによく助けてくれるし、育児だけでなくて家事もやってくれるもんね。
ズレ少・統合無群	ID6	いや、あんまりないんで。あんまり、あんまり感じないんですかね、あんまり、はい。性格的に、どちらかというと、もめるよりは、まあ、いいかっていうほうなんで、何とか自分の中で処理ができるんで。たぶんそれがまたイライラになるんだと思うんですけど。	そうですね。あの、うなずくのがとっても上手なんで、話すと楽になります、はい。私が言って、相談したことを、彼はすごくそれに対して悩んで回答してくれるタイプじゃなかったのが、良かった。
	ID13	いや、もう、それは本当にツライとは分かっているんですけれども、それは本当代わってあげることができないので、頑張ってとしか・・・そのストレスを発散するために、こっちとしてはママさんのお友達とか、そういったコミュニティーで。あっさりしてるんですよ、無理なものは無理って。	あ、でも（夫に土日の朝、子どもを世話してもらうのは）きっかけはあれだったかもしれない。やっぱり最初の方って育児が結構大変で、この私の大変さを思いしればいいみたいなところがあったかもしれない。まあ、大きくなったのでだいぶ楽ですけど、やっぱ小さいころの方が大変ですよね。
	ID14	（子育てにかかわれていないことに対して）悪いなーとは思うけど、こっちもへこみますよね・・・（笑）。何もできねぇよって。	パパが１人で相手をしてくれないっていうか、じゃあ２人でちょっと公園にでも行ってきてっていうのは嫌なんです。

ないの」と、互いの価値観のズレについて「妥協しなきゃいけない」と、模索していた。

また、子育てに対して、「できる範囲であれば、子育てというよりは、進行のサポート、1日の流れの中で、早く帰ってあげないといけないとか、見ていることもそうかもしれないですけど、どうしてもダメなときとか、手伝って欲しいときとか、それは協力するという感じですかね（ID1）」、「もっとね、早く、いつも早く帰れれば、それはそれで（子育ては）楽しいかも。でも、たまに会うから楽しいのかもしれないし、それは何とも。まあ、今ぐらいでちょうどいいのかもしれないね（ID11）」と、基本的には母親が子どもの世話を行い、自らが主体的にかかわろうという姿勢はあまりうかがえない。

父親からパートナーの体験への気づきに触れられないか（ID1）、互いの違いを折り合うことへの葛藤（ID11）が語られた。ID1の母親のように自分だけ内省が深まるとより葛藤的になるかもしれない。

ズレ少・統合有群（8名）5名の父親が、母親（妻）の子育て負担を感じ（例えば、「僕なんかより相当ストレスがあるんじゃないかな（ID2）」「子ども生むとそれだけ大変なんだな（ID5）」）と、それを受けて実際に引き受けている（例えば、「あの付加してくるもの、付加としてそのできてくるものを、どういうふうに組み合わせるかっていうことで対応するしかない（ID2）」「（妻との）コミュニケーションとれれば、頑張れて、ヘルプと言えるそういうような関係さえできていれば、ムリはしていてもと思うんです（ID5）」）。また、ID9の父親は、「一日中家にいて、子どもとずっと一緒に。例えば今自分の立場が子どもにいつもついてもらうのが、ある一日中になったらしんどいだろうなと思って…そういう意味では同じお母さんたちの交流とかって大切なんだろうなっていうふうに、ぼくは実感しますけど」と語った。それに対して、母親（妻）は〈こう、うん、（夫が）もうちょっと（子育てを）やりたいんだなっていうのは思ってたんですけど〉と、父親（夫）が妻自身の立場を受け止めていることに気づき、夫（父親）の体験について語った。

一方、他の3名は、母親（妻）の仕事に対する関心（ID3）、家事や子育てのバランス（ID7・ID8）に触れていた。特に、ID7の父親は、「現実、夫がきちんとしないとか、それは（妻が）もうムカッとくるし、何でしてくれないというのは、それはあると思う」と、母親（妻）は〈自分がどうこうというより、子どものことがあると言わざるを得ないことがあるので、（夫は私を）相当人間変わったと思われていると思います〉と、互いにパートナーから照らし返された体験を、つまり、パートナーの体験を通じて内省的に語った。具体的には、パートナーとのズレを互いに受け止めつつ、ズレを解消するというよりも、ズレをズレのまま親和的に引き受けている。そして、それが、「自分の都合、相手の都合があるけど、それを超えた都合、子どもの都合に合わせる（ID7）」という父親の語りへつながるのだろう。ここでは、パートナーの体験への気づきだけではなく、自分がパートナーから照らし出される体験についても語っていた。そこでのテーマは、父親の「自分の都合、相手の都合があるけど、それを超えた都合、子どもの都合に合わせる」とあるように、パートナーの葛藤を一部引き受けつつ、親子関係という二者関係を越え、母親―子―父親という三者関係の中で、生活全体のバランスをとろうとする試みである。それは、パートナーが何に不満を抱いているのか、それを感じている自分をパートナーがどう考えているかを内省することであろう。言い換えれば、その気づきは、互いに思いを共有することだけでなく、違いに気づき、それを受け止める中でパートナーの成長を見守る、自分がパートナーから見守られていることを示唆するものである。

ズレ少・統合無群（3名）ID6では、「あんまり、あんまり感じないんですかね」、〈私が言って、相談したことを、彼はすごくそれに対して悩んで回答してくれるタイプじゃなかったのが、良かった〉と、夫婦間で子育てに関する悩みを共有する傾向は見られなかった。また、父親は、「何とか自分の中で処理ができるんで。たぶんそれがまたイライラになるんだと思うんですけど」と、自分で対応しようとしているが、それがストレスにもなると、語った。

ID13では、母親（妻）の子育てを通じた友だちとのかかわりに対する意味づけにおいて、「本当につらいとは分かっているんですけれども、それは本当代わってあげることができないので、頑張ってとしか…そのストレスを発散するために、こっちとしてはママさんのお友達とか、そういったコミュニティーで」と、自分とは切り離したところで解釈されていた。

ID14では、〈うちみたいに、「いや、仕事が、仕事が」っていう家庭〉と妻（母親）は捉えているが、一方、夫（父親）は「助ける人がもう2人（夫婦）しかいない…風邪引いて駄目だったら、会社休んで相手するぐらいの気持ちでいるんですけど」「自分なりに考えて、接している時間が短いからな」と子育てにかかわろうとする気持ちはあるが、「基本的に家で見ても、ママのところにしかいないんです」と語り、それに対して著者が“ご自身の中では軽いショックというか…”とたずねると、「重いショックぐらい」と子どもにかかわりたくとも、どのようにかかわって良いのかという逡巡が感じられた。一方、妻（母親）は、〈むしろ、（夫が子育てにかかわらないことを）楽でしょうみたいな。だけど、そうしたときに、思っている以上にショックなんだよと言われたときに、あっそうなんだ。（笑）。結構ね、

ショックだったんだ〉と語り、そうしたズレに直面する機会がないままであったことがうかがえる。

この群では、夫婦間の相互性の下位尺度の〈連携感〉にはズレが見られなかったが、夫婦間の心理的境界が強固なのではないかと思われる。ID14の「(子どもが) 自分になついてないというのも、こっち (自分) が悪い」と、子どもとのかかわりを夫婦間の関係性の中で捉えようとしているが、程度の差こそあれ、その境界は相互に開かれたものではないのだろう。

次に、父親の子育て体験の各群について、もう一つのカテゴリー、時間軸と空間軸から、分析する。

(2) 各群の検討：時間軸と空間軸による検討

1) 時間軸による検討：未来の見通しをもつこと

父親の現在の子育て体験から、未来の見通しを語っているかどうかを、検討した (表4)。

未来への見通しについて、12名が触れた。具体的には、「(保育園の父母会の役員を引き受けたら) そのときには、その、仲良くなった人たちとみんなで一緒にやろうかって思ってるんですけど (ID9)」のように現在から未来を語るパターンと、「ここでたぶん一生懸命(子どもと)かかわっとかないと、あとでね…将来、大きくなってから。まあ、自分たちで、彼女が、彼女がたぶん思う、思うんじゃないですかね (ID4)」「あまり15から16 (歳) とか17から18 (歳) で、そういう時期に、父親とそんな仲いい息子は嫌だなって思うところもあるし (ID15)」という未来から現在を捉えるパターンが見られた。

なかでも、過去を現在からとらえなおし、未来へつなげていたのは、ズレ父高・統合有群の1名、ズレ少・統合有群の3名であった。例えば、「自分が5歳だったときどうだったかって。(中略) 自分のおやじとのスタンスが変わりましたね。(中略) 子どもが自分の父親と私の間に、子ども、息子を置いたことによって、おやじとの距離が短くなりましたね。(中略) 息子が私のことをどういうふうにこれから見ていくのかなとか (ID15)」「今まで自分たちが子どものころに、私の父親もほとんど家にいないタイプで、基本的に父親と遊んでた記憶ってほんのちょっとぐらいしかないんですけど、そういう意味では子どもに接する時間があるんだったら積極的に接しようみたいなのは、どっかで思ってるかもしれないですよね (ID12)」と、未来に向って、前世代とは異なる見方で父親としてのアイデンティティを探っていると思われる。

一方、ズレ少・統合無群では、「自分のちっちゃいころに選択肢なかったじゃん…いや、やりたいことっていう選択肢がなかった (ID13)」「もう少ししたら幼稚園を調べようかなと思ってるんですけど (ID13)」と、子どもの教育への動機づけとして語り、自分がもち得なかったものを子どもに与えたいという自分の願望を満たす文脈で、未来を語った。他の2名は未来について触れなかった。自己と他者は異なった時間的視点を持ち、主観的世界に生きているため、ズレが生じてくるからこそ、意図せざる帰結、つまり、未定の未来が生じる (白井, 2008)。この群では、夫婦間の心理的境界が開かれたものではなく、互いのかかわり合いの中で自己が変化するという実感をもちにくいため、未来を語ることが難しいのかもしれない。

2) 空間軸による検討

① 職場でのかかわり　群ごとの明らかな特徴は見られなかったが (表4)、「いろんなことは相談したりとか、相談にのったりする (ID2)」こともあるが、「自分にできるんだったらそうするかもしれませんし、ああ、それちょっと自分とは考え方違うなと思ったらやらない (ID2)」、「うちもやろうとは、そうは私は思っていない。(ID12)」と即座に他者の助言を取り入れるわけではない。また、「うちのかみさん、(子どもへの不適切なかかわりを) やっちゃうんじゃないかっていうふうな話とかを、子どもに対してね、ストレスがたまって、こっち (妻) 側が (ID15)」という母親の子育て不安と、それに関する自身の不安を語っていた。また、ズレ父低・統合無群では、「あんまり同じぐらいの子どもをもってる人との接点がないんです、そんなに。だから、よそはどうしてるのかなと (ID11)」と、他の父親のかかわりについて気になりながらも、職場では子どもに関する話題を話すことはないと語られた。

表4　各群の時間軸と空間軸に言及した人数　　( ) は%

	未来の視点	職場でのかかわり	地域でのかかわり
ズレ父高・統合有群2名	2 (100.0)	2 (100.0)	1 (50.0)
ズレ父低・統合無群2名	1 (50.0)	0 (0.0)	1 (100.0)
ズレ少・統合有群8名	7 (87.5)	4 (50.0)	3 (37.5)
ズレ少・統合無群3名	1 (33.3)	1 (33.3)	0 (0.0)

② **地域でのかかわり**　ズレ少・統合有群では相対的に地域でのかかわりが多く語られた。しかし、全般的に、父親と子どもだけでは地域に出かけてゆくことは頻繁ではないことが示された。例えば、父親と子どものベビーマッサージに参加した時の感想として「突然お父さんと子どもだけでパッと集められても…どうしたらいいか。(ID12)」「ママの中にパパが１人混ざってるのも、なかなかね、そういう意味の度胸がいるよ（ID8)」と、地域の活動に参加することの戸惑いが語られた。その中でも、地域でのかかわりを深めている人は、父親どうしで子育て以外に話すテーマがあったり（「仕事の話をしたりとか。いろいろ。趣味の話とか、まあ、そういうの。そうね、いい機会って言えばいい機会なんですよね（ID9)」)、父親と子どもだけではなく母親も含めて家族どうしのかかわりがある（〈3家族が、割とお父さん仲間、お父さんとのつながりができてきて、大体お母さん仲間だけで終わっちゃうことがあるんですけど、だんなさんも名前で呼び合うように交流ができるようになってきて…（ID5)〉）と、参加しやすいようであった。

さらに、「(地域のおやじの会は）最終的に行っているのは、子どもにとってプラスになっていると思う、いろいろな子どもが来ているし、親も入っていろいろなイベントをやるんですよね（ID1)」、「子どもができたからそういうことができたから、(子どもと地域に出かけることは）逆にいい機会だって気がしますけどね（ID9)」「なんか居場所としてはいやすくなってくるっていうんですかね。それも子どもがいたからそういう展開になってきたもので(ID10)」と、子どもがいるからこそ、新たな出会いがあると解釈されており、母親と子どものみだけではなく、地域へ父親もともに出かけてゆく構図へと広がりつつある。

以上のことから、父親と子どもが地域の活動や場に入ってゆく戸惑いが語られたが、子どもがいるからこそ、地域での出会いが広がり、新たな自己を生成する契機が示唆された。

一方、ズレ少・統合無群では、〈パパが１人で相手をしてくれないっていうか、じゃあ２人でちょっと公園にでも行ってきてっていうのは嫌なんです（ID14)〉と、地域でのかかわりについて語られなかった。

Ⅳ　総合的考察

夫婦間の相互性のズレと仕事と子育ての統合によって、

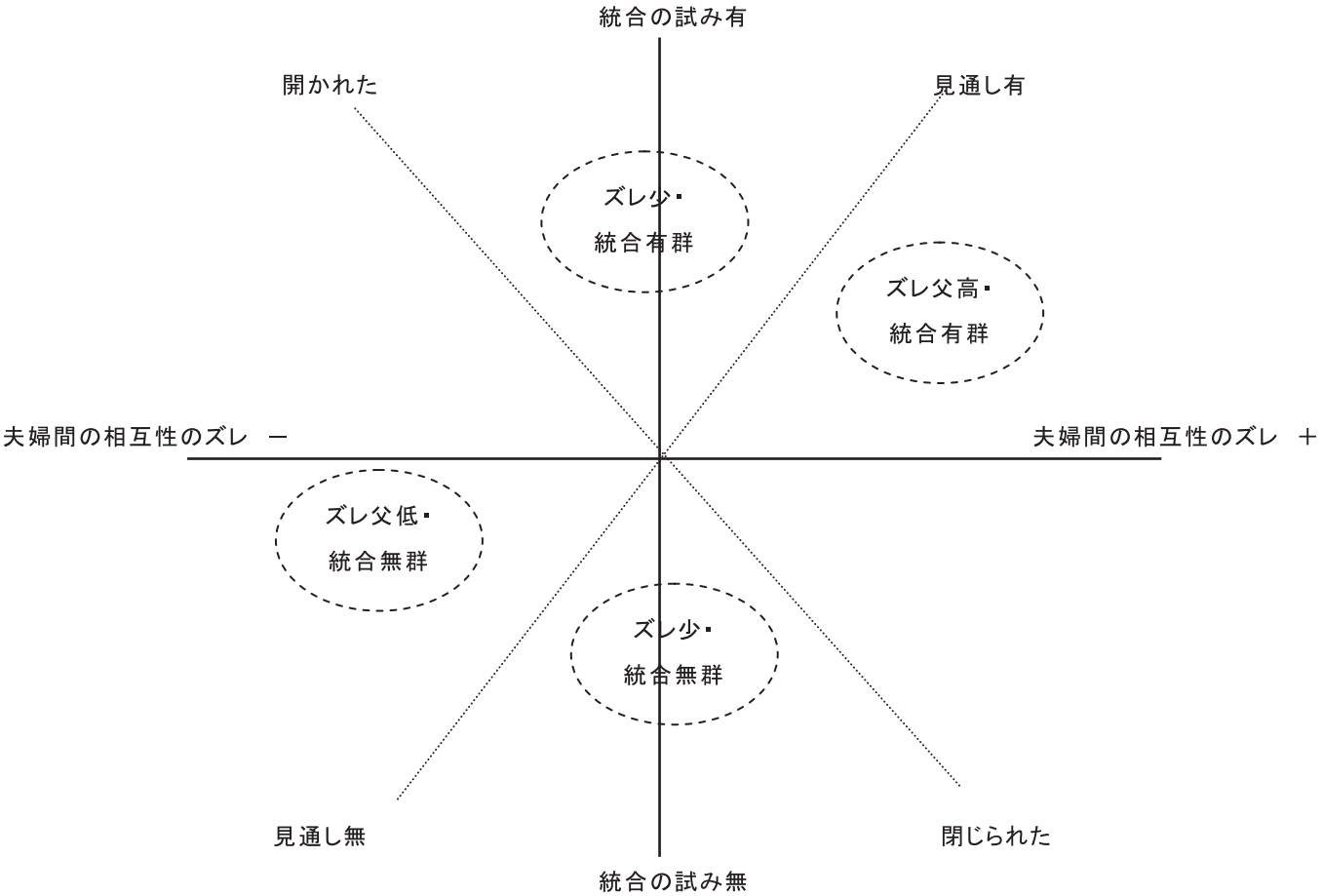

図１　父親の子育て体験の布置

父親の子育て体験がどのように異なるのかを、面接による語りから検討した。まず、夫婦間の相互性尺度の〈連携感〉の得点の差と、仕事と子育てを統合しているのかという視点から、群を抽出した。そして、各群の特徴について、パートナーの体験への気づきならびに、Erikson のライフサイクル論に依拠して、時間軸（未来へ開かれていること）と空間軸（職場と地域でのかかわり）の観点から、質的に検討した。

これまで得られたことをふまえ、父親による子育て体験の全体構図を示す（図 1）。まず、横軸に夫婦間の相互性のズレ（＋が父親の得点の方が高く、－がその逆である）、縦軸には仕事と子育ての〈統合の試み有〉〈統合の試み無〉を、次に、職場や地域での子育てを通じたかかわりが〈開かれた〉〈閉じられた〉ものかという空間軸と、未来への〈見通し有〉〈見通し無〉という時間軸を交差させ、位置づけられた。それに基づき、本研究で抽出された群が布置された。

これにより、本研究で得られた結果を 2 つあげる。

第一に、父親が仕事と子育てのバランスをとり、生活に組み込むことは、個人だけでなく、父親―子―母親というシステム的視点で捉えることが重要であると示された。夫婦間の相互性のズレが相対的に少ない群は、図 1 に示されたように、子育てと仕事の試み、つまり、父親がどのようなバランスで生活したいのかを考え、どのように実行していくかで、その布置が大きく異なると考えられる。

Erikson の〈トータリティ〉〈ホールネス〉の概念を用いると、ズレ少・統合無群では、仕事と子育てという境界があり別々に隔てられているが、ズレ少・統合有群では、仕事と子育てを生活の中に再編成することを通じて、ズレが生じるものの、ズレも込みで受け入れ、かかわってゆく動きが見られる。さらに、父親個人内だけでなく、夫婦間においても、ズレ少・統合無群では、互いのズレを顕在化させることなく、子育てを夫婦間で捉えられていなかった（「何とか自分の中で処理ができるんで。たぶんそれがまたイライラになるんだと思うんですけど。（ID6）」「まあ、そういうことを流す程度にお互い話して（ID14）」）。対照的に、ズレ少・統合有群では、「心苦しいというか、自分が（子育てに）参加できないというストレスもあるし。（妻が）なんか全部やっているという、心苦しいという 2 つの気持ちが…それよりも 2 人で一緒に働いた方が、全部どっちかがやるっていうんじゃなくて、均等に（ID9）」と、自らが妻との関係性に入りこみ、語っていた。

第二に、父親の子育て体験は、夫婦間の相互性がどのくらいズレているのかという量的側面だけでなく、互いの違いに気づき、そのズレを含めてパートナーの体験を内省するという質的側面や、さらに、未来の見通しをもつことや、子育てを通じた生活空間の拡がりとも密接に関連することが示された。

例えば、ズレ父高・統合有群では、母親に比して、父親の得点が高かったが、2 名とも未来や職場でのかかわりについて語っていた。その得点の偏りは、夫婦間のかかわりのアンバランスというよりも、先述したように、パートナーの価値観や行動とのズレの意識の反映と解釈できるだろう。そのような父親の体験は、例えば「父親になればどこかでやらざるを得ないところはあるんですけれども（ID15）」という語りから、あきらめ、妥協と否定的なことと捉えられるかもしれない。しかし、自らがパートナーに働きかけることが先にあるのではなく、パートナーからの働きかけを受け、折り合っていると考えられる。子どもを育てる中で、これまで通用していた生活の布置を修正しなければならず、特に、子どもが幼い時期、どのように夫婦で協力するのか、何を優先するべきなのかと、夫婦で選択することが問われる。

心理臨床的観点から、本研究で得られた父親の子育て体験の布置は、Erikson のライフサイクル論を依頼し、夫婦間でどのようなズレが見られるのか、そのズレを夫婦間の相互性の中で捉えられているのか、未来への見通しをもてているのか、家族を超えて地域や職場でどのようなかかわりがあるのかと、具体的な視点を提供するものである。

最後に、本研究の課題と今後の展望を述べる。一つには、本研究の協力者は、首都圏に住む、比較的高学歴で正規雇用されている方が大多数であった。仕事のストレスに触れている者がいたが、雇用そのものが不安定だという不安は少ないと思われる。ここで得られた知見は、首都圏に住む正規雇用されている父親の体験として位置づけるべきだろう。

もう一つには、夫婦間の相互性のズレが少ない群の内、仕事と子育てを統合しようとしない群では、夫婦間の心理的境界が柔軟でないこと、未来の視点が語られないことが明らかになったが、そうした家族が生き生きとしたかかわり合いをもてるよう、子育て支援で考えることが必要である。例えば、仕事のストレスに関して、乳幼児を育てている時期に該当する 30 ～ 40 代の父親の総労働時間が最も長いだけでなく、仕事に関して強い不安や悩み、ストレスがある割合が男性の 30 代では 63.8％、40 代では 65.5％と高く（厚生労働省，2008）、メンタルヘルスの状態が憂慮される。したがって、仕事のストレスが軽減され、メンタルヘルスの状態が安定したところで、地域での活動にかかわろうという余裕が生まれるのではないか。その視点があってこそ、母親と子どもだけでなく、家族が地域に根づくことへつながるのだろう。

（謝辞）

面接調査にご協力いただいたみなさまを初め、協力者募集にあたって、お世話になりました方々に、心より感謝申し上げます。また、お茶の水女子大学の青木紀久代先生から丁寧なご指導を、お茶の水女子大学の篁倫子先生から貴重なご助言をいただきました。深く感謝いたします。

（注）

1　面接調査では、夫婦間の関係性を双方の視点から捉えるために、父親だけでなく、母親にも同席していただいた。これ以降の分析では、主に父親の体験を取り扱うため、○組ではなく、○名と各群では表記する。また、文脈上、パートナーとの関係で捉えている場合、それぞれ、夫（父親）、妻（母親）と記す。

2　面接場所は、大学の研究室（1組）、喫茶店（2組）、自宅（12組）であった。著者は、協力者の内、2名の母親とは面識があったが、それ以外の母親ならびに父親とは、本研究の面接調査にて初めて顔を合わせた。

3　福岡市の調査では、夫婦ペアデータで、夫婦間の相互性とメンタルヘルス（抑うつ傾向）との関連を検討している。福岡市のデータ301組では、平均値は－.35、標準偏差は.79と変動がみられないことを確認した。また、夫婦間の相互性尺度は〈連携感〉〈パートナーへの思いやり〉〈柔軟さ〉の3下位因子で構成されている。本研究において、〈連携感〉を用いたのは、福岡市で行った301組の夫婦で、〈連携感〉のみにて有意な差が見られたからである。〈連携感〉は、「ささいなことでも妻（夫）と話し合う」「家族に関する問題を夫婦で話し合う」「小さなことでも夫婦で話し合って決める」「家族に困ったことがあれば、妻（夫）にアドバイスをもらう」「自分自身に関する悩みを妻（夫）に相談する」の5項目である。

（文献）

Boath EH, Price AJ, Cox JL（1998）：Postnatal depression: The impact on the family. *Journal of Reproductive and Infant Psychology*, 16(2), 199-203.

Cowdery RS, Knudson-Martin C（2005）：The construction of motherhood: Tasks, relational connection, and gender equality. *Family Relations*, 54(3), 335-345.

Erikson EH（1964）：*Insight and Responsibility*. New York：W.W.Norton. 鑪 幹八郎（訳）（1973）洞察と責任―精神分析の臨床と倫理　誠信書房.

Erikson EH（1980）：Identity and the life cycle. New York：W.W.Norton.

Erikson EH, Erikson JM（1997）：*The life cycle completed―A review expanded edition*. New York：W.W.Norton. 村瀬孝雄・近藤邦夫（訳）（2001）ライフサイクル、その完結　増補版　みすず書房

Everingham CR, Heading G, Connor L（2006）：Couples' experiences of postnatal depression: A framing analysis of cultural identity, gender and communication. *Social Science & Medicine*, 62(7), 1745-1756.

Hall W（1991）：The experience of fathers in dual-earner families following the births of their first infant. *Journal of Advanced Nursing*, 16(4), 423-430.

Hirsch B, Rapkin BD（1986）：Multiple roles, social networks, and women's well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51(6), 1237-1247.

金子郁容（1992）：ボランティア―もうひとつの情報社会　岩波書店

柏木惠子・若松素子（1994）：「親となる」ことによる人格発達―生涯発達的視点から親を研究する試み　発達心理学研究, 5(1), 72-83.

Knudson-Martin C, Mahoney AR（2005）：Moving beyond gender: Processes that create relationship equality. *Journal of Marital and Family Therapy*, 31(2), 235-258.

厚生労働省（2008）：厚生労働省発表資料　平成20年10月10日　平成19年労働者健康状況調査〈http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/saigai/anzen/kenkou07/index.html〉

Mauthner NS（1998）：Re-assessing in the importance and role of the marital relationship in postnatal depression: Methodological and theoretical implications. *Journal of Reproductive and Infant Psychology*, 16(2), 157-175.

南博文（1995）：人生移行のモデル　南博文・やまだようこ（編）講座生涯発達心理学　5老いることの意味―中年・老年期　金子書房　pp.1-40.

西平直（1993）：エリクソンの人間学　東京大学出版会

岡本祐子（1995）：人生半ばを越える心理　南博文・やまだようこ（編）講座生涯発達心理学　5老いることの意味―中年・老年期　金子書房　pp.41-80.

小此木啓吾（1989）：自己とは何か　岩波講座　転換期における人間―心とは　宇沢弘文他（編）岩波書店　pp.151-208.

Olin R, Faxelid E（2003）：Parents' needs to talk about their experiences of childbirth. *Scandinavian Journal of Caring Sciences*, 17(2), 153-159.

Quek KMT, Knudson-Martin C（2006）：A push toward equality: Processes among dual-career newlywed couples in collectivist culture. *Journal of Marriage and Family*, 68(1), 56-69.

白井利明（2008）：自己と時間―時間はなぜ流れるのか―　心理学評論, 51(1), 64-75.

Stern DN（1995）：*The motherhood constellation: a unified view of parent-infant psychotherapy*. New York：Basic Books. 馬場禮子・青木紀久代（訳）（2000）：親－乳幼児心理療法　母性のコンステレーション　岩崎学術出版社

Stern DN（2004）：*The present moment in psychotherapy and everyday life*. New York：W.W.Norton. 奥寺崇（監訳）津島豊美（訳）（2007）：プレゼントモーメント―精神療法と日常生活における現在の瞬間　岩崎学術出版社

鑪幹八郎　（2002）：アイデンティティとライフサイクル論　ナカニシヤ出版

鑪幹八郎　（2006）：精神分析から見た中年期－中年期以降の心の危機　岡本祐子（編）現代のエスプリ　別冊　うつの時代シリーズ　中年の光と影 至文堂, pp.57-70.

Vandell DL, Hyde JS, Plant EA, Essex MJ（1997）：Fathers and "others" as infant-care providers: Predictors of parents' emotional well-being and marital satisfaction. *Merrill-Palmer Quarterly*, 43(3), 361-385.

Wiesman S, Boeije H, van Doorne-Huiskes A, den Dulk L（2008）：'Not worth mentioning'：The implicit and explicit mature of decision-making about the decision of paid and domestic work. *Community, Work and Family*, 11(4), 341-363.

山口智子（2004）：人生の物語の発達臨床心理　ナカニシヤ出版
谷田征子・青木紀久代（2007）：乳幼児をもつ妻からみた夫婦間の相互性―夫婦間の相互性のタイプと不公平感との関連　心理臨床学研究，25(4)，408-418 .
谷田征子・青木紀久代（印刷中）：母親からみた夫婦間の相互性と子育てに対する感情との関連―地域ネットワークに着目して心理臨床学研究，27(2).

PROCEEDINGS 08
July 2009

Fathers' Perspectives on the Experience of Child-Rearing: Discrepancy in Marital Mutuality and Integration between Working and Child-Rearing

Masako YATSUDA
(Human Developmental Sciences)

The purpose of this study is to examine how fathers construct their lives when raising young children, focusing on the discrepancy in marital mutuality and integration between working and child-rearing on the basis of a qualitative analysis of in-depth interviews with 15 couples. Four groups were identified. Next, these four groups were analyzed in terms of each partner's awareness and temporal and spatial axis of Erikson's life cycle theory. Through an examination of this framework, it was found that it is important to consider a systematic view (father-child-mother) when fathers balance work and child-rearing. According to the concepts of "wholeness" and "totality" in Erikson's theory, those who belong to the group that shows little discrepancy in marital mutuality with integration between working and child-rearing have a flexible psychological boundary with their partners. Moreover, it is pointed out that fathers' perspectives on the experience of child-rearing are related to not only the extent of discrepancy with regard to marital mutuality but also to self-reflection, the future, and sharing of life space. Only four fathers referred to the temporal integration of their recalled past and views on the future in their present experiences.

In the work setting, regardless of the group, some fathers interacted with other fathers and acquired information about child-rearing. On the contrary, in the community setting, most fathers expressed hesitation about participating in community activities with their children. On the other hand, in the group with little discrepancy in marital mutuality without integration between working and child-rearing, none of the fathers participated in community activities. However, interaction with other fathers and families could be an opportunity for men to generate a new sense of self when they are with their children.

As implied, in modern societies, fathers have little scope to participate in community activities with their young children owing to long working hours. Further, the issue regarding the mental health of fathers must be considered from the viewpoint of psychological support for parental child-rearing.

Keywords: father, working, child-rearing, perspectives, marital mutuality